

MACF 礼拝説教要旨

2023年11月19日

「関わりの深さと信じるということの関係」

ルカによる福音書 24 章

- 1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。
- 2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、
- 3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。
- 4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。
- 5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。
「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。
- 6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。
- 7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」
- 8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。
- 9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。
- 10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、
そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、
- 11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。
- 12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、
亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

イエスさまは十字架にかけられ、苦難を通過し、息をひき取りました。
それは誰の目から見ても確実な出来事でした。
そして、その遺体はアリマタヤのヨセフという議員の厚意によって引き取られ岩に掘った墓に納められました。その岩の洞穴のような墓には大きな岩が蓋のように立てかけられていて誰も動かすことができないように封印までされていました。
マタイによる福音書 27 章 62 節から 28 章を読むとそのあたりのことが詳細に書かれています。とても興味深い内容になっています。

1) 途方に暮れる女性たち

最初香料をもって墓を訪れようと考えていた女性たちには、あの墓を封印している岩をどのように動かしたら良いのかということが悩みの種でした。自分たちの力では到底動かすことができないほど大きな頑丈な岩だったからです。

ところが、石は墓のわきに転がっていました。さらに中を覗いてみるとイエスさまの遺体がそこになかったのです。

彼女たちは動転し、途方にくれました。

2) 輝く衣を着たふたりの助言

婦人たちが途方に暮れている時、そこに輝く衣をきた二人の人が現れました。名前は記されていません。

神様からのみ使いでしょう。天使とも呼ばれる存在だと思います。私たちは天使というと背中に羽をつけて小さな弓矢を持っているお人形のような存在を連想しますが、あれはギリシャ神話の中でのキューピットです。

聖書の中の天使はイメージが大きく違います。普通の人のようであったり、旅人のようであったり、輝かしい姿の存在者だったりしています。急に現れ、急に消えることが可能な存在です。

でも間違いなく神様から遣わされてきたという何かを表明しています。

マリアに現れた天使には名前がありました。天使ガブリエル。

しかし、この二人は名乗っていません。

天使の役割は神様からのメッセージや助言を伝えることにあります。

ここでは彼らはこう伝えています。

*

5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。

6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。

まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。

7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、

三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」

3) 思い出すこと・信頼すること

彼女たちはイエスさまの言葉を思い出し、そしてこのふたりの言葉を信頼します。

心には何かしら感動があったと思います。

こんなふうにかかれていきます。

8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。

9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。

10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、

そして一緒にいた他の婦人たちであった。

婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、

11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。

この最後の一節「11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」

という言葉は深刻です。

婦人たちはイエスさまの言葉を思い出し、空の墓を見て、信じ、興奮気味に弟子たちに伝えたとはいえず。

ところが弟子たちは、彼女たちの話がたわごとのようにしか伝わらなかったのです。

いわば、婦人たちは第一目撃者であり、使徒たちはそれを伝え聞いた傍観者という感じかもしれません。それらの話が「ひとつごと」なのです。

悲しみといわゆる人間的な常識、そして、これからの不安がとても強く使徒たちの心をとらえていて、「イエスさまの死からの復活」ということなど想像することさえできなかったのだと思います。

人間的に考えれば、それはそうだろうなと思います。

そもそも死んだ人が甦って、しかも傷だらけの形での蘇生ではなく、死に打ち勝った新しい体を持った存在として甦るということですから、なおさらです。

でも、イエスさまはそのことを前もって何度も使徒たちには伝えていました。

それらの言葉が、恐怖や不安の中でかき消され、思い出すこともできず、たわごとのように感じてしまう、これはまさに人間の弱さそのものなのかもしれません。

弟子たちは不安と恐怖で心がいっぱいになっており、イエスさまとの「かかわり」を思い出す余裕もなかったのかもしれません。

一方、女性たちは香油を塗ってあげたいという気持ちがあり、行動に移しましたから弟子たちよりは、ちょっとだけ心の余裕はあったように思います。

私たちはイエスさまとの「かかわり」「出来事や発言」を「思い出し」「信頼する」ことを継続するために礼拝をし、み言葉を学び、感じ取ろうとしているように思います。

聖書の言葉の伝えている「リアルな救い主」の現実的な力と現れを今、心と身体に体験しながら生きようとしています。

聖書の言葉を理屈として知るだけでなく、自分の出来事として感じ取り、思い出し、追体験しイエスさまの現実的な働きを信じながら日々を過ごすそうとしているのです。

今までの人生の中でイエスさまとの「かかわり」がどうだったのかを静かに思い出すことは有益です。あるいは、呼吸にしっかり意識を向けて黙想してから聖書の言葉に向かうことも有益です。心の中にある恐れや不安や怒り、心を縛っている心配事をちょっと、横において「イエスさまのかかわり」に意識を集中しながら聖書に向かってみると良いと思います。

疑うことは当然あるでしょう。

信じられないと感じる内容も当然あります。

でも、イエスさまが語った事柄が「他人事」にならないように注意したいですね。

そのためには「心からっぽにして」「イエスさまとの関わりを思い出し」「イエスさまの言葉を思い出す」ことが大事です。

そして、何度も読み返し、思い巡らし「感じ取る」ことが必須かもしれません。

そのうえで信頼していくのです。

盲信ではありません。

単に理屈で納得できたからということだけでもありません。

自分のところに届いてこそ信じることができる内容が多いのです。

だからこそ、聖書の言葉を「思い出し、思い巡らせるように読み、聞き、感じ取る作業」が重要なのです。

それにしても使徒たちは、なぜ婦人たちの発言をたわごととしてしか理解できず、信じようとしなかったのでしょうか・・・。

もしかしたら「恐怖心」と「常識的意識」そして「死の向こうに行ってしまったイエスさまの言葉がそらぞらしい他人事のようにしか思えない」ことが根底にあったように感じます。そして、それまでの「かかわり」を思い出せないくらい失望していたのでしょうか。

それは私たちの感覚ととても近いように思います。

無理に信じ込む必要はありません。

わからないこと、疑いたくなることはたくさんあるでしょう。

それでも「イエスさまとの関わりと言葉」を心に蓄え、それを反芻する作業は止めてはならないのだと思います。

MACF 礼拝映像はこちらです。

https://youtu.be/2rS62yt4_9g